

概要

『情報社会の建築のありかた』私の卒業設計はこのテーマから始まった。まず、具体的なプログラムとして、明治時代の学制発布以降あまり変化のない学校建築に目をつけて、新しい学校のあり方を模索する事にした。

タブレットや液晶モニターを利用したICT教育を考察することにより、した。そこで現在政府が推進しているICT教育を前提とした近未来の小学校を、私の母校で構想することにした。

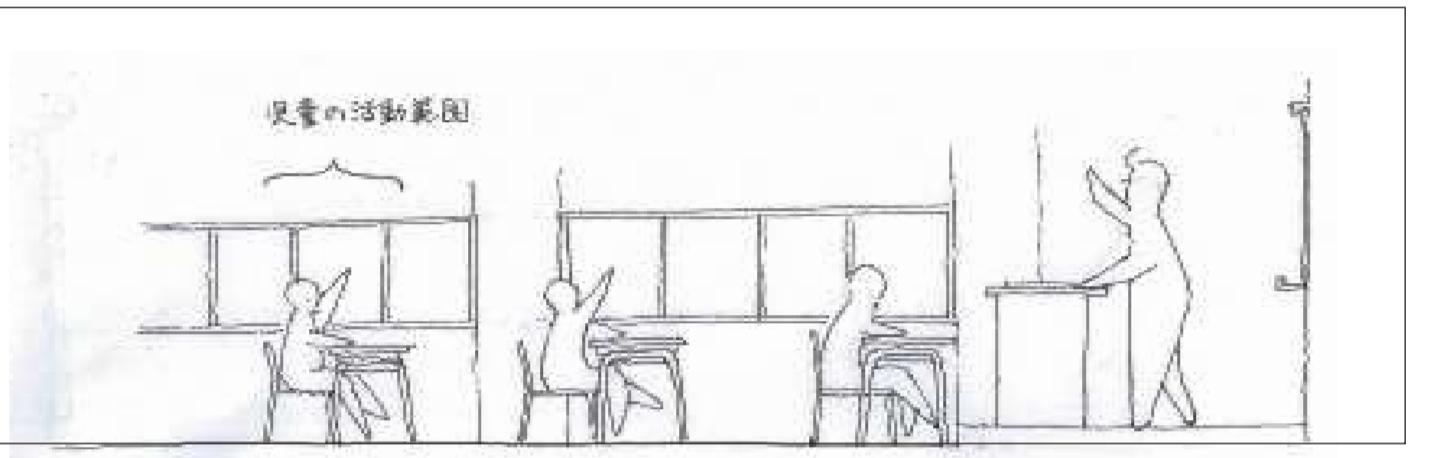
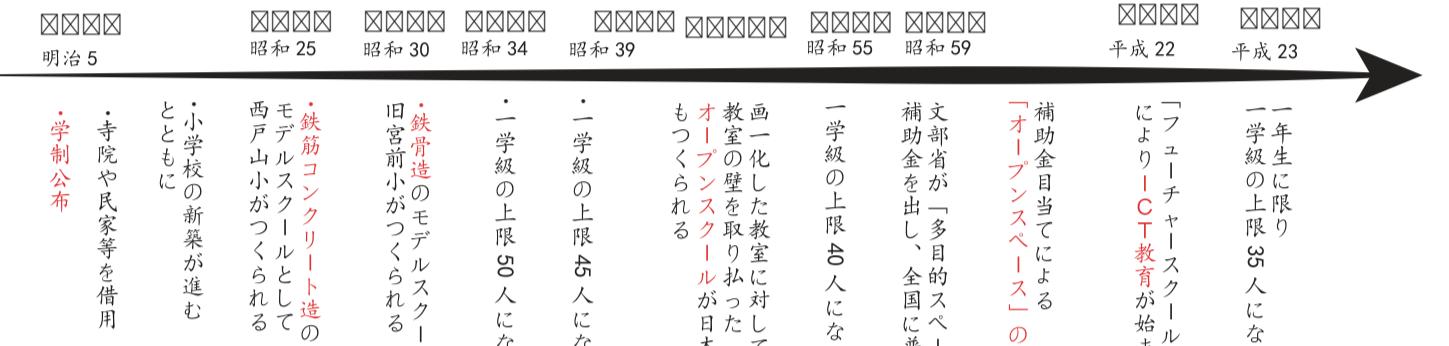
しにした。しかし、これまでの学校を大きく変える可能性を導きだした。この3つの項目を設計の軸とし、こどもたちがよりのびのびと自由に樂しく過ごせる公園のような小学校を計画した。設計に際して、授業によってさまざまな場所性を選択できるよう、内な場所と外な場所の差をつけつつも、連続的に両者をつなぎたいと考えた。その結果、教室の床は起伏を繰りかえしながら渦を巻く形状であり、こどもたちはそこに生まれた段差に腰掛け居場所をつくる。校舎全体も渦を中心につなぎし、内な教室と外な教室で場所性に差をつけた。

情報化と空間

現代人には、SNS等の仮想空間に意識が集中し、現実空間が見えていない状況が多々ある。通信技術の進歩によって拡大した仮想空間と、実際に私たちが存在する現実空間のバランスが取れていないからではない

小学校というプログラム

windows95の登場以降、この20年の通信技術の発達によって人々の生活は劇的に変化している。学校教育では総務省が2010年に始めた「フェューチャースクール推進事業」により、ここ数年で電子黒板やタブレット端末を利用したICT教育が普及しつつある。しかし、どれもアナログのものが電子機器に代替されただけで使用方法の変化はない。情報端末ならではの仮想空間を最大限に活用した新しい授業のスタイルを考えた。



学校の歴史

明治5年の学制発布以降、日本の学校建築は二度大きな変化を迎えた。一度目は戦後の復興時であり、それまで主流であった木造校舎が、耐火・耐震機能を備えたRC造またはS造の校舎にとって代わったこと。

現状の教室・学校

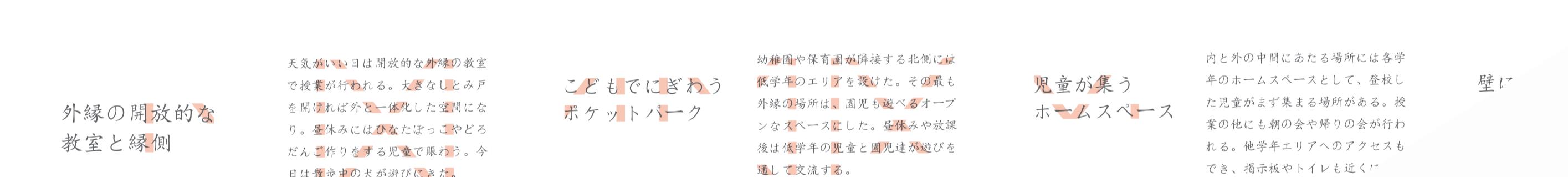
二度目は、1970年代に画一化された教室がみなおされた際に日本に登場したオープンスクールである。しかし、本来の意図とは異なる補助金によって造られたものもあり、「オープンスクール」が画一化している。

現状の教室では、個人の教科書や勉強道具は机の引き出しに収納されている。ひとりひとつの机が固定。児童は全員前方を向いていすに座り、先生は黒板の前からあらり動かず児童と向き合う形。基本的に児童は授業中常に着席している。

授業中に席を立つことはあまりないため、授業中の活動範囲は狭い。

児童は全員前方を向いていすに座り、先生は黒板の前からあらり動かず児童と向き合う形。基本的に児童は授業中常に着席している。

は利用されていない。



外縁の開放的な
教室と縁側

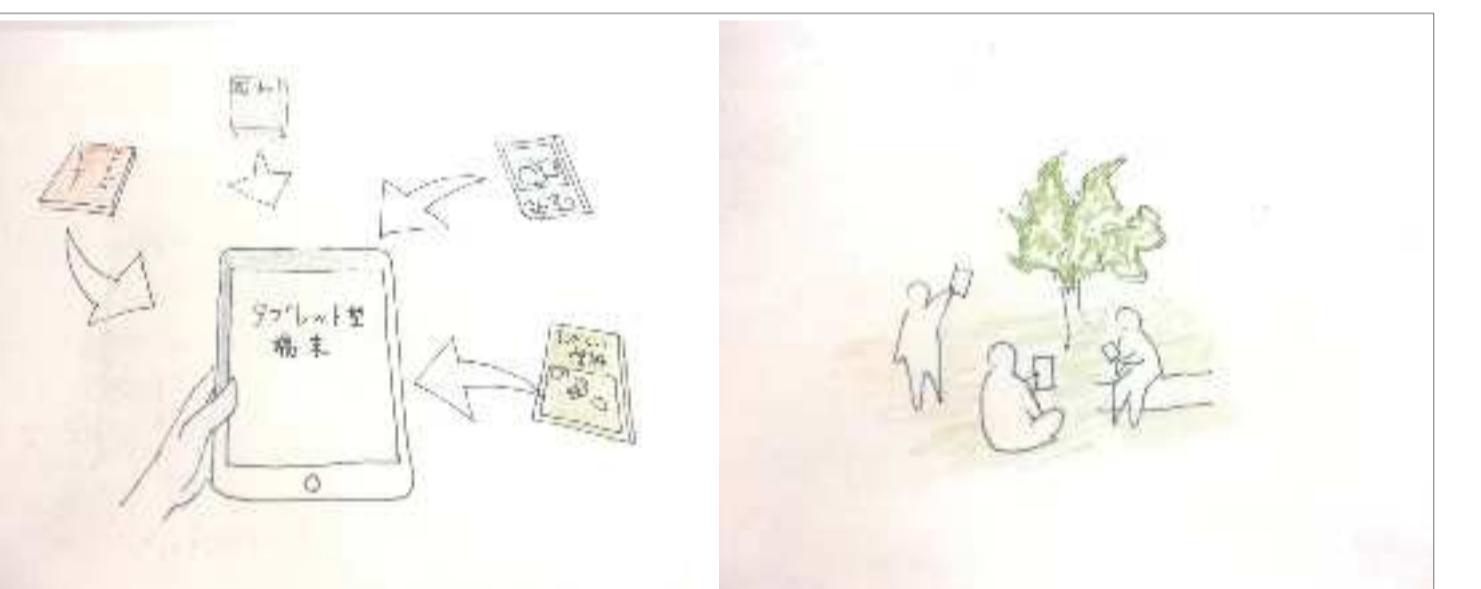
天気がいい日は開放的な廊下の教室で授業が行われる。大きな窓と戸を開ければ外と一体化した空間になります。臺休みには必要なだけの子どもたちを作りながら児童で賑わう。今日は豪華な火遊びがはじまっている。

子どもでにぎわう
ホームスペース



千丁小学校

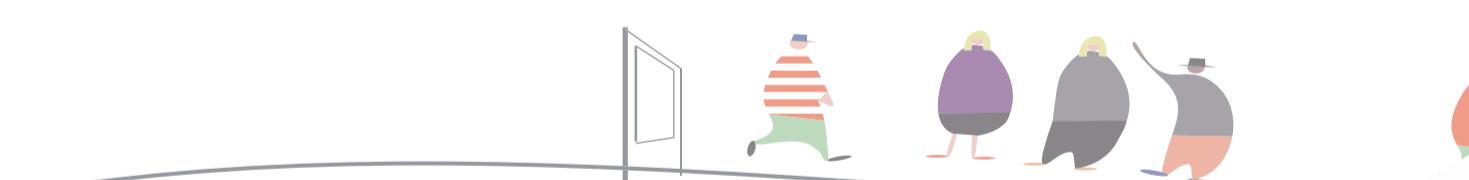
熊本県八代市立千丁小学校。私が6年間通っていた小学校を設計の敷地とした。旧千丁町は人口約7000人、面積約11km²。江戸時代に八代海を干拓して農地である。い草や、野菜の生産がさかん。町内の建物のほとんどが低層の住宅であり、敷地の北には保育園と幼稚園、南には図書館、公民館、文化センターがある。博物館や美術館は近くなく、町民が利用できる専門的な工具や楽器などを備えた施設も学校以外ではない。



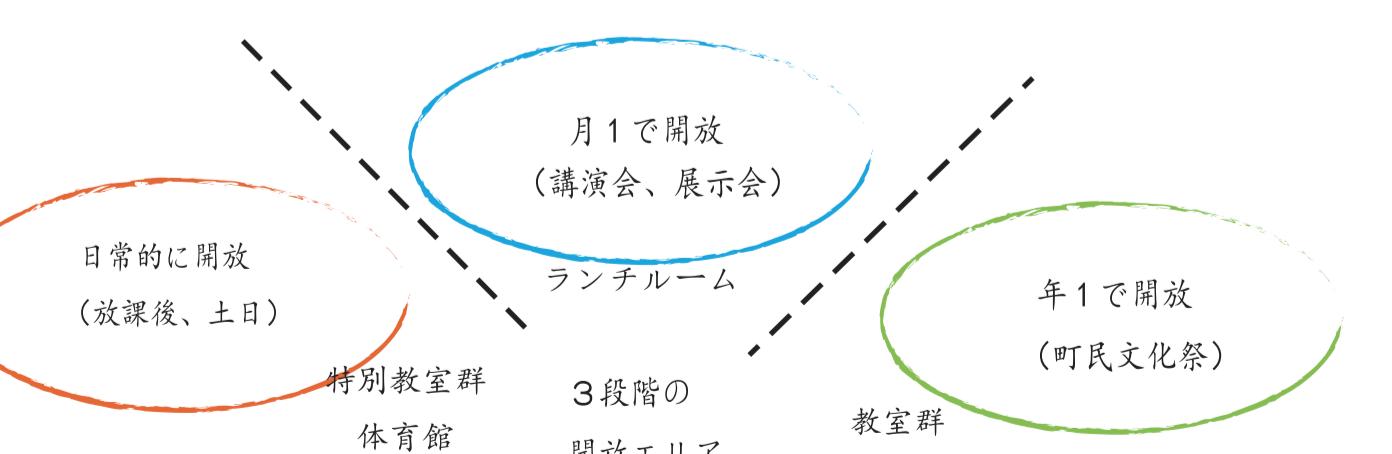
これから授業スタイル

これからは、教科書などはすべて手のひらサイズのタブレットの中に保存されている。児童がそれぞれの机に固定される必要がない。

タブレットをもって床や段差に腰かけたり、状況に応じて自由な体系

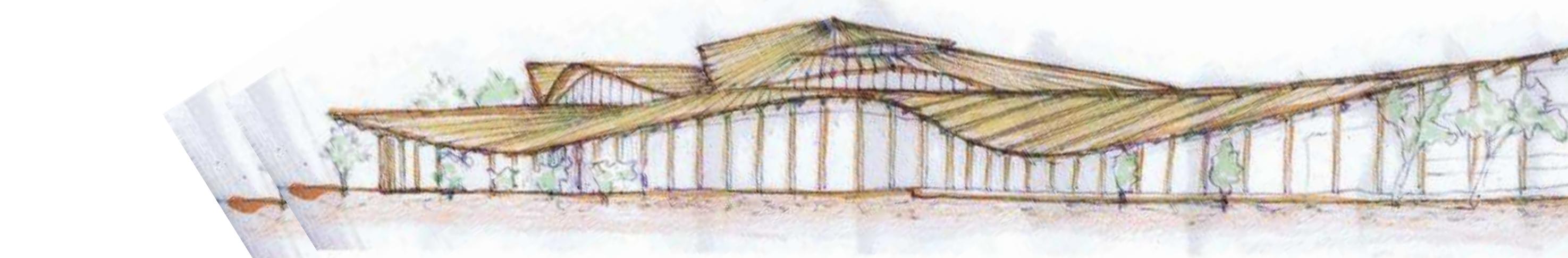


情報化によって建築



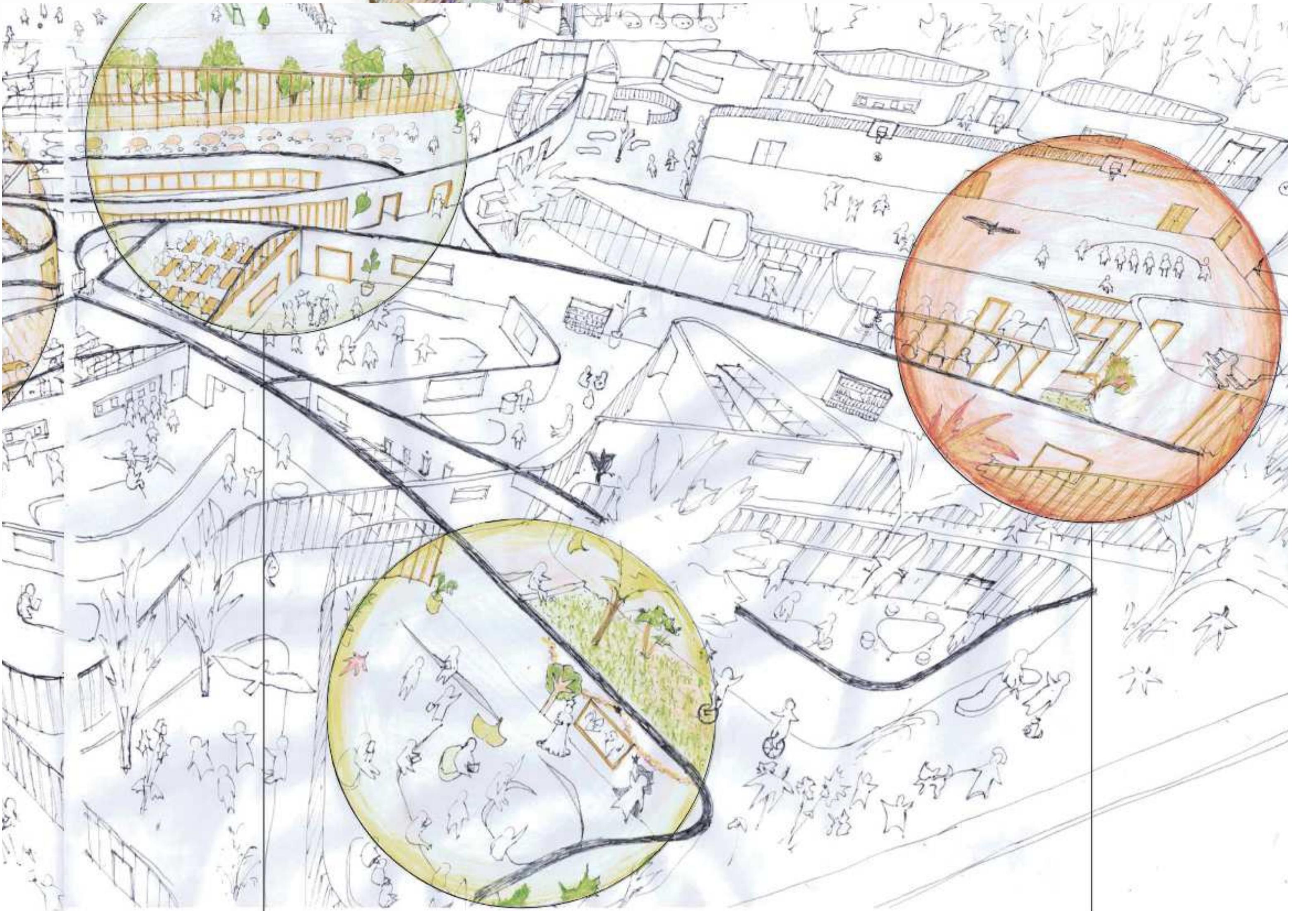
これからの学校

教室そのものも内的なものと外的なもので差をつけた。中心の内的な場所から放射状に各学年のエリアがのび、外縁には限りなく外部に近い教室をつくった。また生徒の持ち物はタブレットとして地域に開放できる。



これからの教室

児童が自分のお気に入りの居場所を発見できるように、内的な場所と外的な場所との差をつけた。また、起伏を繰り返すスラブが渦を巻くことで差異のある内外に連続性をもたらす。これまでのような長方形の教室



学校の最も中心にある場所には図書スペースを設けた。南側は全高グラスで最も明るく広い室内空間である。月に一度のペースで開催される著名人の講演会や作品の展示会の際は地域の住人に開放される。

広く明るい ランチルーム

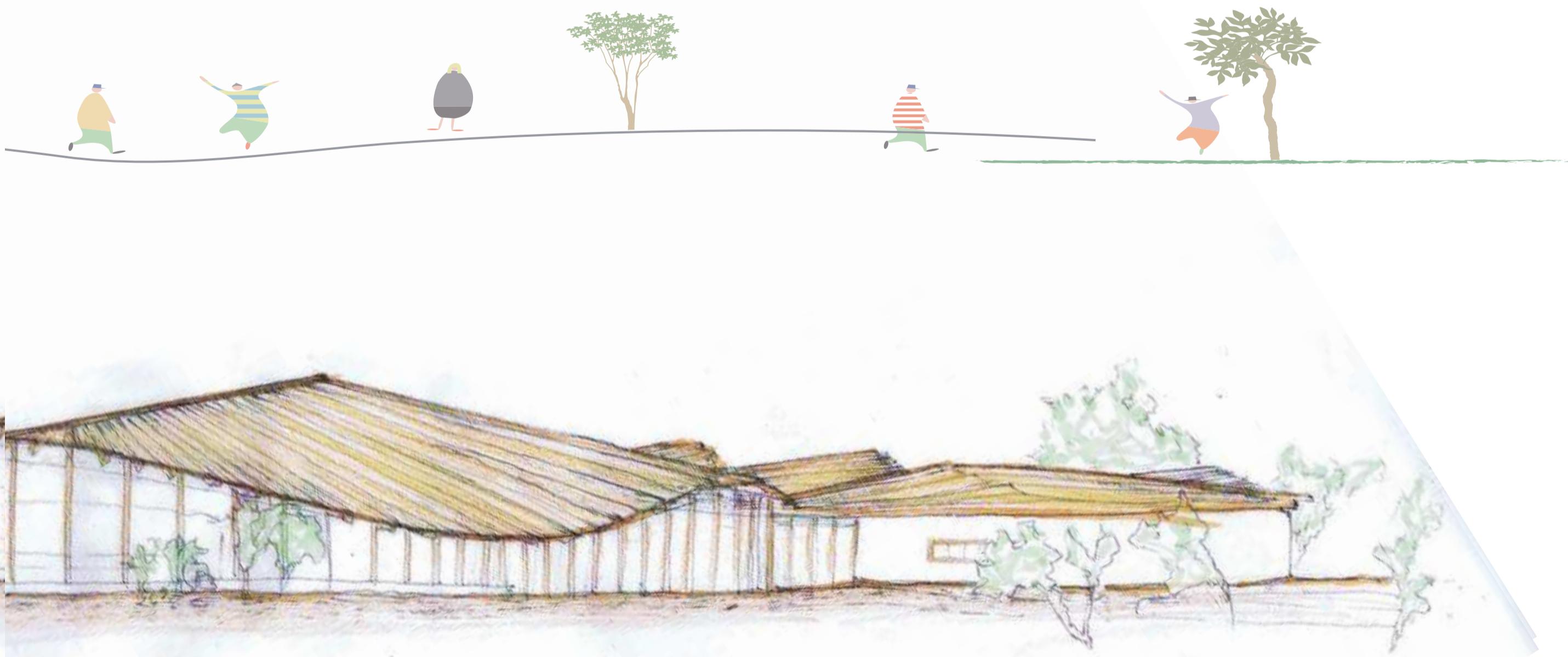
給食の時間には全校生徒がここに集まり給食を食べる。南側は全高グラスで最も明るく広い室内空間である。月に一度のペースで開催される著名人の講演会や作品の展示会の際は地域の住人に開放される。

アクティビティに 応じて選べる教室

スラブの段差を利用して児童が自発的に居場所をつくる。今日は国語の单元のまとめとして、ちょっとした演劇を行っている。休日は多目的室として開放される。外縁のঙ屋での活動はこの学校のファサードとなる。

町民も利用しやすい 体育館と特別教室

外部からダイレクトにアクセスできる特別教室のエリア。体育館のフロアを地下に掘り下げることで、エンタランスと上階の観客席を同一レベルにした。放課後と週末は地域に開放され、多世代が交流する場となる。



Plans

